

	測 定	す る	能 力
論理的言語力	論理的読解力A	論理的読解力B	論理的思考力
日本語を論理的に扱う能力。一文の構造を論理的につかまえたり、「ことばのつながり」、指示語・接続語などを論理的に扱う力。	文章を論理的に読む力。趣旨を的確に把握する力。小説などを客観的に読む力。	文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落と段落との論理的関係、文章全体の論理構造を把握する力。	文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に説明する力。おもに記述力・論述力。
			論理的表現力
			他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

問題I 論理的言語力

第一問

■解答 (各4点 完全解答)

(1) 行数 八 行目	正	誤	というものである。
(2) 行数 四 行目	正	誤	安置して遺灰を黙祷をささげ
(3) 行数 三 行目	正	誤	遺灰を安置して黙祷をささげ
(4) 行数 十三 行目	正	誤	あるいは、しかし、
(5) 行数 九 行目	正	誤	海とのつながりのある、人の約一割は海とのつながりのある人の約一割は、

■解説

- 「問い合わせには」の述語である「ものである」が対応していない。
- 「安置して」の目的語が「遺灰を」なので、語順を入れ替える。
- 「まく」の目的語が「遺灰」なので、助詞を「を」に変える。
- 前の文章と後の文章が反対のことを言っているので、逆接の接続語を使う。
- 「ある」は直後の「人」を修飾しているため、読点は不必要。

第二問

■解答 (各10点)

第二段落 ところで、これ
第三段落 あるいは、先に
■解説
第一段落は、「散骨事業」へ大手海運会社も乗り出したとして、その例を挙げている。第二段落では、これまでの日本人の死者の葬り方に対する考え方、第三段落では、そうした考え方が今や変わりつつあることを指摘している。

問題II 論理的読解力A

第一問

■解答 (8点)

大きなものの中における自分の位置の哀れさと貴さ。

	測 定	す る	能 力
論理的言語力	論理的読解力A	論理的読解力B	論理的思考力
日本語を論理的に扱う能力。一文の構造を論理的につかまえたり、「ことばのつながり」、指示語・接続語などを論理的に扱う力。	文章を論理的に読む力。趣旨を的確に把握する力。小説などを客観的に読む力。	文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落と段落との論理的関係、文章全体の論理構造を把握する力。	文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に説明する力。おもに記述力・論述力。
			論理的表現力
			他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

問題III 論理的思考力

第一問

■解答 (各5点 完全解答)

- 知るためには・感性が誰かは・しかし
- 自分の考えや気持ちを人に正確に伝えるためには論理が必要である。

第二問

■解答 (6点)

世界遺産に指定された富士山は誰でも知っている、日本一高い山である。

■解説

③を中心にするという条件を忘れないこと。そこで、①の「誰でも知っている」と、②の「世界遺産に登録された」を、それぞれ「山」「富士山」を説明する語句に変形して、③に代入する。

第三問

■解答 (8点)

母語は人の精神に深く関わるものだ

■解説

井上ひさしの「日本語教室」の引用から始まった文章で、筆者の主張は「それ(母語)は単なる道具ではなく、その人の精神に深く関わる」なので、それを字数以内にまとめる。

第四問

■解答 (8点)

言語処理能力を高めることで、頭脳OSを強化する必要があるので。

■解説

コンピュータはたとえ。最終結論は「だから」の後の末尾「言語処理能力を高めることで、私たちの頭脳OSを徹底的に強化する必要がある」。

第五問

■解答 (8点)

苦痛の中にも快を見いだすこと。

■解説

人の行為を決定するのは快不快だけであるということが、趣旨。——線部の「荊棘」が苦痛、「薔薇の花」が快楽をたとえたもの。

■解説
線部の三行後に、「その悲劇性」とあるので、その指示内容を字数以内にまとめる。

第二問
■解答 (8点)
己の位置の悲劇性に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢に求める強さ。

■解説
線部直前の指示語「この」該当箇所が「その悲劇性に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢に求め」であることをつかまえる。さらに直前に「己の位置の悲劇性」とあることに着目。最後は「強さ」で終わること。

第三問

■解答 (6点)

肉体上の無防御

■解説

三蔵法師は内面に「貴い強さ」を持っているが、外は悟空の助けが必要なほど弱い。「具体的」十字以内」という条件から、「肉体上の無防御」。

第四問

■解答 (8点)

いっどこで窮死してもなお幸福でありうる心を、師はすでに作り上げておられる。

■解説

線部の前にある「だから、外に途を求める必要がないのだ」が、傍線部と同内容。その「だから」に着目すると、その前が理由である。

第五問

■解答 (各2点)

- イ
- エ
- ア
- ウ
- オ

■解説

- 悟空の師に対する気持ちを選ぶ。
- 沙悟浄が、師と悟空を比べていることから考える。
- 二人の共通点であることから、ア「ともに」に着目する。
- ア「必然を完全と感じている」を受けて、ウ「その必然」とつながる。
- 直前の指示語「この」がウ「その必然を自由とみなしている」を指していることから、オ「必然と自由」とつながることが分かる。

問題Ⅳ

論理的読解力B

第一問

■解答 (10点)

E ↓ B ↓ C ↓ D ↓ A

■解説

冒頭は、大学で三年勉強したが、ついに文学は分らなかったということ。それを受けて、E。冒頭の「そんなあやふやな態度で」とある。

Eでは教師になったが、「その本領(本来やるべきこと)」というのがあるようで、無いようで、どこを向いても、思い切ってやっと飛び移れない」。それを受けて、B「何をしていいか少しも見当がつかない」となり、末尾の「この先自分はどうなるのだろう」を受けて、Cの頭の「私はこうした不安を抱いて」となる。

私はふくろの中に詰められている気持ちがして、キリがあれば破ってみせると焦っていたのだが、Cでは、外国に渡って、ロンドン中を探したがキリは見つかりそうになかったとある。

Cの末尾で、何のために書物を読むのか、その意味が分からなくなったとあるのを受けて、D「この時」と続く。結局は他人の書いた書物ではなく、自力で作り上げるよりほかにないと悟ったのだ。そして、Dでは、何でも西洋をありがたがる今の風潮を批判している。

Dの末尾「みんながそれをほめるのです」を、Aの冒頭の逆接「けれども」が受けている。いくら人に褒められても「借着」である限り、いつまでたつたって安心できないとしている。

第二問

■解答 (各2点)

(1) ウ (2) オ (3) エ (4) イ (5) ア

■解説

- (1) 直前の「わからずじまい」から、ウ「煩悶」。
- (2) 直後の「孔雀の羽根を身に着けて」から、オ「借着」。
- (3) 直前の「文学とはどんなものであるか」から、エ「概念」。
- (4) 直前の「自力」の対立語。後ろに「人真似」とあることから、イ「他人」。
- (5) 直前の「鶴呑」から、「わが所有とも血とも肉ともいわれない」となるので、ア「所有」。

第三問

■解答 (5点)

キリ

■解説

段落Bに「私の手にただ一本のキリさえあればどこか一カ所突き破って見せるのだが」とある。

第四問

■解答 (5点)

せんで

■解説

段落Eの二行目に「どうかこうかお茶を濁して行かれるから」とあるから、無事に済むはずなので、その直後の「無事にすんでいませんでした」が間違い。

第五問

■解答 (各2点)

(a) エ (b) イ (c) ウ (d) ア (e) オ

■解説

- (a) 直前の「これではどうていわかるはずがありません」を受けて、「それなら」。
- (b) 前文「明らかに見たい」という話の流れを後文で「ぼんやりしている」とひっくり返しているので、逆接の「ところが」。
- (c) 前文と後文の関係を考える、因果の「だから」。
- (d) 前文の具体的な例が、後文になっているので、例示の「たとえば」
- (e) 前文を前提に、後文を付け加えているので、添加の「しかも」。

問題Ⅴ

論理的表現力 (40点)

■ポイント

- ① 論理展開ができているか。(西洋との対比・具体例から始める・結論でまとめるなど)
- ② 論文の文章として適切にできているか。正確な日本語が使われているか。
- ③ 段落分けが適切か。
- ④ 原稿用紙の表記の仕方に従っているか。

■解答例

日本人の芸術感とは庭に良く現れている。庭師が庭を完成した時はまだ美は途上であり、やがて自然の力を借りてその美は完成する。それに対して、西洋の公園は予め設計され、人為によって初めてそれは完成される。言わば人間が設計したものに自然が当てはめられるようなものであり、古びればまた修理することでその美を永続させようとする。

西洋の芸術が人為によって成し遂げようとするのに対して、日本の芸術は自然と一体化したものだと言えよう。たとえば、私たちは「花は散るからこそ美しくけれ」と昔の人が歌ったように、その一瞬の美を大切にす。 「平家物語」の無常観も、夏の夜空に咲いては散っていく打ち上げ花火の切なさも、すべては日本人独特の芸術感に通じている。

それは人為の力によって永遠の美を構築しようとする西洋の芸術とは異なり、日本人の芸術感とは絶えず変化する自然の、その一瞬の命の輝きをつかもうとするからなのである。